

4 田代三喜の新発見の医書『本方加減秘集』の検討

遠藤 次郎・中村 輝子

日本の後世派の開祖と言われる田代三喜と曲直瀬道三を研究する過程で、これまで全く知られていない田代三喜の医書、『本方加減秘集』を見出した。

本書は大阪府立図書館石崎文庫に所蔵されており、一冊、五丁よりなる筆写本で、国書総目録には記載がなく、また、石崎文庫の目録には書名はあるものの、筆者が誰であるかは記されていない。

本書には序文や編纂された年は記されていないが、末尾附近に「三婦撰之」とある。本書の内容の一部に『和極集』との密接な関連が見出されることから、本書の著者は、『和極集』と同一の著者、初代の田代三喜であると見なすことができる。また、編纂された年は、新撰『和極集』から没年に至る間、一五二五年から一五四四年の

間と推定される。

本書の内容は二六病門からなる基本処方部（『本方』）と三一病門からなる加減方の部の二つに大別され、両者は相互に呼応し合うように構成されている。『和極集』をはじめ、三喜の医書の多くは「基本処方とその加減方」という二本柱で構成される傾向にあるが、本書はその特徴を最も顕著に表現している。

本書における基本処方は一般的な処方が大半を占め、中でも、『和剂局方』に由来するものが最も多い。他書に見られない本書の特徴は、各病門の基本処方の数が極めて少ない点、ならびに、「諸病通用之薬方」という項目が存在する点である。これらのことから、「諸病に通用する薬方」を設けて各病門の基本処方の数を抑え、また、基本処方を抑えたために生じる不足部分を加減方の部を充実させることで対処した、と推測される。

基本処方の中に、中国の経方書にはほとんど見ることのできない処方が存在している。ことに、このことは「諸病通用之薬方」の項目において顕著である（一五处方中、一三处方）。著者らは、当時の日本の関連医書を調査し、

次の医書の中に、それらの処方が存在することを見出した。また、それらの処方は日本で創られたものであると推定した。

・半井家『一卷之書』

・半井道三『周監方』

・半井家『家伝慶拝湯加薬』

・曲直瀬道三『医心正伝』・『蘇人湯方』（↑半井家）

・『三位法眼家伝秘方』（↑半井家？）

・西忍『藪明集』（↑田代三喜？）

この結果、「諸病通用之薬方」にある多くの処方は、半井家の家伝の秘方に由来することが明らかになった。

半井家の経方書を時代を追って整理してみると、時代が下るにつれて基本処方の種類を減らしていることが判明した。例えば、「通仙院法印半井蘆庵伝十三方」（曲直瀬道三『医心正伝』所収）では、『和剂局方』等の処方の中から応用範囲の広い一三の基本処方を選び、それぞれに加減方を附して諸病に対応するように構成されている。また、曲直瀬道三が半井明英から拝受したと言われる家伝の秘方、「蘇人湯方」は一つの基本処方と二〇〇近い加減

方で構成されている。半井家『家伝慶拝湯加薬』においても「慶拝湯」という一つの基本処方と一〇〇近い加減方よりなっている。

半井家の経方書に見られる特殊な基本処方、ならびに「基本処方と加減方」という構成を勘案すると、『本方加減秘集』における田代三喜の医説は半井家の医学の影響を多分に受けたと考えるのが妥当であろう。

これまでの田代三喜の医学に関する研究は、もっぱら中国本土の李朱医学との関係を重視し、日本の伝統的な医学との関連性にほとんど言及していない。平安時代以来、日本の宮廷医の一翼を担ってきた半井家の医学との類縁性は、三喜の医学のルーツを知る上で重要な示唆を与えてくれる。また、これらの結果によつては、今日では顧みられない「田代三喜は半井道三の門人であった」という『梅の花』の説も再考されるべきかも知れない。

（東京理科大学薬学部 薬用植物・漢方研究室）